# 托児所のある村

小川未明

青空文庫

村は静かでありました。

広々とした、托児所の庭にだけ、わらい声がおこったり、子供たちのあそびたわむれるさけび声がして、なんとなく、にぎやかでありました。

よく晴れた、青い青い大空には、ぽかりと、一つ白い雲が、浮かんでいました。雲も、下のこのようすをながめて、うらやましがっているようでした。

若い保母さんも、元気でした。子供といっしょになって、かけたり、おどったりしていました。くつをはいた子供、ぞうりをはいた子供、げたをはいた子供、いろいろでした。また着ているものも、さまざまでした。

けれど、そんなものは、だれの目にも入りません。ただ、みんなは、光の海を泳ぐように、かみの毛を風に波立たせ、たのしくて、しかたがないと、小さい胸をふくらませていました。

さっきから、いくたびか、つばめが、子供たちの頭の上を、とびまわっていきました。

それを見た一人の子が、

「つばめも、おにごっこしているんだね。」と、いいました。

「そうよ。いいお天気だから、よろこんで、あそんでいるのよ。」と、一人の子が、こたえました。

これを聞いた保母の娘さんは、

「つばめばかりでなくてよ。ごらんなさい。あの木の枝がダンスをしているでしょう。」と、いいました。

「ああ、おかしい。ダンスだって。」

「ほんとうだわ。よく見ると、おどっているようよ。」

こう、みんなが、まわりの木や、鳥や、草に、気のついたときに、はじめて、自分たちがうれしいときには、まわりのものが、やはり、みんなうれしく、たのしくあるのが、わかりました。

さっきから、すずめも、おしゃべりし、わらったり、とびまわったりしていたし、花だんの、白い花は、いつもより、かおりが高かったし、赤い花は、とけて流れそうに、色つやをおびて、美しかったのです。

ああなんという、たのしい一時だったでしょう。そして、めぐみ深く、こぼれるようにてらす太陽の光と、さえずる鳥の声と、自然の子たち、子守歌のようにささやく風の音より、この平和の世界を、じゃまするものは、なかったのでした。

みんなは、つかれたので、思い思いの場所で休みました。あちらのベンチに、こちらの芝生に、三人、四人というふうに。そして、保母の娘さんは、ひたいに汗をにじませて、子供たちにとりまかれて、休んでいました。

ちょうどそのとき、入り口から、男の人が、はいってきました。顔見知りの役場のものでした。

「いそいで、やってきたから、汗をかいた。」と、いいながら、顔の汗をふきました。

保母さんは、なんのご用があって、そんなに、急いできたのかと、男の顔を見まもりました。

「東京から、お役人や先生がたがやっていらして、托児所をごらんなさるというのだ。教育上のご参考に、なさるのだろう。もうじき、見えるだろうから、失礼のないように、知らせにきたのだ。」

と、いいました。

若い保母さんは、どうしていいか、わかりませんでした。どぎまぎしながらも、子供たちにむかって、はなをかめとか、きたない手をきれいにあらってこいとか、注意しました。むじゃきな子供たちも、先生が急にあらたまって命令するので、どんなえらい方たちだろうかと、そらおそろしいような感じがしました。

やがて、その人たちの足音と、こちらへ近づく話し声が、聞こえました。もう、その姿が、そこへ、あらわれました。

男の役人は、ぴかぴか光った、勲章のようなものを、胸につけていました。そして、はいているくつも、上等のものとみえて、つるつる光っていました。また、洋服姿の女の人も、一行にまじっていました。その人の指には、ダイヤモンドが、かがやいていました。これを見た、瞬間に、つめたい空気が、あたりを流れました。

いままで、鳴いていたすずめの声も、聞こえなくなりました。青い空に浮かんでいた白い雲も、うすく消えかかりました。子供たちは、ただ、むしょうに、保母さんが、かわいそうに思われました。

「さあ、なにかうたって、聞かせてください。」と、東京からきた女の人が、いいました。けれど、だれも、うたってきかせようとはしません。

「ここでは、いつも、どんな遊びをするんですか。」と、黒い服をきた役人は、保母さんに、聞いていました。なんのかざりも、身につけていない娘は、顔をまっ赤にして、小さい声で、それに答えていました。

お客さまの一行は、花だんのまわりをひとめぐりして、外のほうへ出ていきました。ちょうど、日がかげって、赤い花の色は、黒く見えたし、白い花のかおりは、さっぱりしなくなったのです。

画家が、托児所の小屋をとりいれて、新緑の木立を写生していました。役人や、学者の一行が、そのそばを通りかかりました。

「こんな、広々とした自然の中で、育ったのだから、もっと、明朗で、かっぱつに、うたったり、おどったりされないものかな。」

「なんだか、いじけているじゃありませんか。」

こんな、批評をしながら、過ぎかけたが、その中の一人が、ちょっと立ちどまって、カンバスをのぞきました。すると、他のものも、いっしょに立ちどまりました。

青年画家は、筆をとめて、彼らを見あげました。

「それは、あなたたちのほうが、むりですよ。」と、画家がいいました。

「なぜかね。」と、きっとなって、背の高い役人が、青年の顔をにらみました。

「ここらの子供は、日ごろ、あまり、えらそうな人を、見ないからです。」

「なにも、われわれは、えらそうじゃないだろう。」

「どこか、えらそうに見えるんですね。そんな人が、こわいんです。」と、画家は、いいました。

よく見ると、その青年は、右足は義足で、草の上に、松葉づえがおいてありました。

「あんたは、この土地のものかね。」と、一人が、聞きました。

「この土地のものではありませんが、みんなの気持ちは、よくわかっています。お役人や、金持ちや、学者は、自分らの仲間でない。

いつも上のほうにいて、命令するものだと、思っているから、きゅうに、いっしょになって、わらったり、話したりすることができぬのです。おそらく、大衆が、そうでしょう。いままで、上から、おさえつけられてきましたからね。」

「そういう君も、画家らしいが、展覧会にでも出品して、名をあげたいためでないか。」

「とんでもない。それは名誉欲の強い人のことです。私も上からの命令で、戦争にやらされ、生まれもつかぬ不具者となって帰りました。しかし、自然は、いつ見ても平和で美しい。人間も、まちがった考えや、欲望さえもたなければ、たがいに、したしみあうことができて、美しいにちがいがありません。私は、風景や、生物の、たのしく生存する姿をかいて、みんなにしめし、その喜びをわかちたいと思うのです。」と、画家がいうと、黒い服をきた背の高い役人が、きっと、青年をにらんで、口をとがらし、なにかいおうとしました。そのとき、ダイヤをはめた美しいお嬢さんふうの女が、

「おや、ごらんなさい。私たちがいなくなると、あんなに、子供たちが保母さんをとりまいて、元気よく、さわいでいるじゃありませんか。絵かきさんの、おっしゃることにも、真理があるわ。この問題について、もっと研究してみましょうよ。」と、先に、口をきったので、一同は、にぎやかな、わらい声の聞こえる托児所のほうを、ふりかえりながら、立ちさりました。青年は、いまのこともわすれて、ふたたび絵の中に、たましいを打ちこんでいました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社
　1954（昭和29）年6月
初出：「文学教育　第1集」
　1951（昭和26）年10月
※表題は底本では、「托児所《たくじしょ》のある村《むら》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2020年1月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 托児所のある村

小川未明

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/